

お茶うけ短編小説（2025 年版）

琴線に触れた男

C. BOWLINN

やらかしてしまった。

謝罪に向かう車中、何度もため息がついて出る。

こんなに気持ちがどんよりしているというのに、フロントガラス越しの空がきれいだ。

まるで白群のようだ。冷たそうな太陽も煌びやかで、心にゆっくり沁みていく。

いやいや、いまはそんな悠長なことを言っていられない。

ミスをして謝りに行くのは、初めてではないが、今回は、ちょっと違う、

事の重大さから一人では対応できないだろうと、わざわざ所長に同行してもらうことになった。

ラッシュアワーにはまだ早いけど、年の瀬のせいで、国道がやや渋滞気味なのが気がかりだ。

お客さんとの約束の時間までは、あと 20 分。

遅刻でもすれば、もう万事休すだ。

待ち合わせ場所までくると、車に気づき、落ち着いたようすで手をあげている所長を発見。助手席に乗ってもらい社用車をお客様のもとへと走らせた。

車に乗り込むなり、所長がおもむろに切り出した。

「隈田っ！」

「は、はい」

「上得意のお客様を怒らせてしまった。これからレクチャーすることは、肝に銘じておくんだぞ」

「かしこまりました。よろしくお願いします」

「発注ミスをしたのだから、ディーラーとしては弁解の余地はない。年内納車が間に合わず、新車で正月を迎えることができないんだから、お客さんが怒り心頭なのはごもっともだ。しかし、よりによってなんでボディカラーなんか間違えるんだ？」

思い込み。同じ車種を気に入られた似た名前のお客様がいて、二人の顔を間違えて認識してしまったのがケチの付き始め、直前でキャンセルのあったお客様の希望されていた色そのまま発注してしまったのだ。

「申し訳ありません。注意が散漫でした。」

「こっちに非があり、お客さんはカンカンなのだから、もう平身低頭で謝るしかないほかない」

「はい」

「ただ、ピンチはチャンスだ。誠意が伝われば、こういうときこそ、お客さんとの距離は縮まるものだ。」

「ほんとですか！？」

「ああ。いわば、お客さんの逆鱗に触れた後に、琴線に触れれば、もうこっちのものだ。隅田にこれからその極意を伝える」

「きんせん？それはどこに触れればいいんですか？」

所長は、なんだかうまいこと言ったみたいだが、意味がわからず、困り顔でいると、所長の顔が曇った。蔑んだようにこちらをみている。

「・・・。隅田なあ。」

「やる気スイッチとおんなじだ。それは心の奥底にあるんだよ」

交差点を右折すると、空の色は、くすみがかった紅碧になっていた。風が吹いているのか側道のすすきがおいでおいでをしているようだ。そのすすきの枯草色とのコントラストが鮮やかだ。対向車もライトを点け始めた。

「隅田。よく聞け。世の中には4種類の間がある」

「4種類？」

「そうだ。その4種類のうち、隅田は『下から2番目』だ」

「順番があるのですか？」

明らかに誉め言葉ではない。
でも自分の位置よりもまだ下があることがなんだか嬉しい。
絶望的に落ち込んでいる今の心境では、4番目でないだけ『まし』だ。

「もちろんある。1番下は、『賢そうにみえてあほなやつ』。これが最悪に性質が悪い」

「たち？」

「周りの者が、期待をしたり、こいつはできるって誤解するだろ？それなのにできないのだから、がっかりすることこの上ない」

「なるほどです」

「うらはらに、『あほそうにみえて賢いやつ』こいつは最強だ。俺は、そんなやつには、勝てない」

「所長でも勝てないのですか？」

「勝てない。勝てない。『賢そうにみえて賢いやつ』というのは当たり前すぎて意外性もへったくれもないだろ？その点、『あほそうにみえて賢いやつ』は、期待値ないところからいきなりやってくるのだから、それはもう衝撃度が違う」

「そういうことですか」

所長は、自分で自分のことを『賢そうにみえて賢い人間』と思っているのかな。それなりに謙虚さを兼ね備えておくことも必要な気がする。いやいや、そんなこと思っはいけない。自分のミスで一緒に来てもらっているのになんて失礼なことを考えてしまったのだ。

助手席の所長が、半笑いで話しかけてくる。

「隅田はだな。そのまんま『あほそうにみえてあほなやつ』だろ？」

「え？」

「それは予定調和だから、まだマシなわけだ。うん。許せるってやつだwww」

所長は、誰にでもこんな感じなのか？今日の自分は何を言われても仕方がない。でもそれこそ誰かの逆鱗に触れたりはしないのだろうか？

曲がりくねった道の先に大きな山が見える。
空の色が深まり、山は全体に藍を染めたような留紺。
太陽は鴉の尾羽のように弱々しく優しくぼやけてきている。

あの山のふもとには、お客様の自宅がある。少しずつお客様に近づいている。

調子が出てきたのか、所長の口調が滑らかになってきた。

「まあ、下から 2 番だからといって気にするなよ！隅田。4 種類の間がれば、様々な価値観になって意見なんて一致しないように思えるが、根っこの部分では、案外一致するものだ。つまり 4 種類の間に所詮大差はない」

「そうですか？『月とすっぽん』くらい違うと思いますけど」

「『すっぽん』ときたか（笑）。すっぽんではないけど、ナマコの話をする。隅田は、ナマコと人間の共通点を知っているか？」

「ナマコって、あのヌメヌメした海の生き物ですか？」

「そうだ。そのナマコだ。やつら目や耳がないどころか、心臓も脳もない」

「手塚治虫の『どろろ』に出てくる百鬼丸と共通ってことですか？」

「なんだそれ？それは知らんが、ナマコの遺伝子は、70%人間と同じだ」

「え！？7割もですか？」

「しかも、人間とナマコは、まず肛門ができて、そこからからだ作られていくという共通点もある。」

「え？人間って口からではなく肛門からできていくんですか。目からウロコです」

なんだか、うまいこと突っ込みができたような気がしたが、所長は、それには少しも触れずに続けた。

「だから、世の中に 4 種類の間がいが、俺が 2 番目だろうが、隅田が 3 番目だろうが、所詮はナマコとほとんど同じだ」

「なんだか救われた気がします。」

「発注ミスもしかり。クヨクヨしたって仕方がないぞ」

元気が漲ってきた。

「ありがとうございます！」

夜のとばりがおり、空の光がすっかり吸収され、あたりは紺滅となった。

お客さん宅に到着。

ギリギリだけどなんとかと間に合ってよかった。

車を降りると、山おろしの寒風が肌身にしみる。緊張も手伝って身震いした。

「あっ！」

思わず大きな声を発してしまった。

「どうした？」

「所長っ！お客さんの『きんせんにふれる』っていう極意。教えてもらっていません！」

開いた口が塞がらない所長。

所長は、自分を賢そうにみえて賢いやつとかいってはいたけれど、もしかして、もしかすると、まさかの「賢そうにみえてあほな人間」なのか？

いや、そんなはずはない。間違ってもそんなことは、あってはいけない。

そうだ！わかった！人間をたった4種類でわけること自体がおかしい。

この空の色だって、こんなにわずかな時間にこんなに多様に変化するのだから。大発見だ！世の中に人間は5種類いる！

見上げるといつの間にか星空になっていた。澄み切った夜空にはオリオンが舞い立っていた。

極意は教えてもらえなかったけれど、所詮人間なんてナマコだ。

お客様の目を見て話そう。決して目を逸らさず、非は非として認め、お客様の声に耳を傾けながら、何ができるのかを考え、無い知恵を絞りだそう。

勇気をふりしぼって、インターホンを鳴らした。

おわり